

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 21 日現在

機関番号：30103

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720163

研究課題名（和文）モンゴル系危機言語であるシネヘン・ブリヤート語の総合的記述

研究課題名（英文）Descriptive Study on Shinekhen Buryat, one of the endangered Mongolic languages.

研究代表者

山越 康裕（YAMAKOSHI YASUHIRO）

札幌学院大学・人文学部・准教授

研究者番号：70453248

研究成果の概要（和文）：

本研究課題は中国北方で使用されるモンゴル系言語のひとつ、シネヘン・ブリヤート語の音韻・文法の総合的な記述および一次資料の公開を目的とした。研究期間を通じて、1本の言語資料（民話3篇）、文法概略の公刊と、以下3点を明らかにした。

- (1) シネヘン・ブリヤート語の人称所有小詞は、(所有者人称標識としての機能を失いつつある現代モンゴル語と異なり、) その本来的機能である所有者の人称標示機能を残している。また、脱従属化マーカーとして機能している可能性がある。
- (2) これまで「形動詞」と記述されてきた形式のいくつかは、その名詞性と動詞性から出動形容詞または出動名詞とみなすべきである。
- (3) 形動詞の機能は一見形容詞と類似している。しかし副詞的に使用される際のふるまいが異なることから、通言語的にいわれる分詞の特徴、「動詞の屈折的形容詞化」には完全には合致しない。

研究成果の概要（英文）：

This research project aims to describe the phonology and grammar of Shinekhen Buryat (a Mongolic languages spoken by Buryat immigrants from Russia in northern China), as well as to make a language documentation of it. Through this three-year project, language materials and a grammatical sketch of Shinekhen Buryat were published and three points were clarified as follows:

- (1) Personal possessive particles function mainly as possessive markers in Shinekhen Buryat (on the other hand, personal possessive particles in Modern Mongolian lose their function as possessive markers), and these particles may function as the markers of insubordination.
- (2) Some of the aforementioned participles should be classified as nominals (deverbal nominals), since they have more noun-like and less verb-like features than other "typical" participles.
- (3) Cross-linguistically, participles are defined as the inflectional transposition from verbs to adjectives. This definition seems applicable to Shinekhen Buryat participles; however, the syntactic features of participles are different from those of adjectives. When a participle is used as the predicate of an adverbial clause, it always appears with some enclitical particles, which do not appear with adjectives that modify verbs.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000

年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：言語学（記述言語学）

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：ブリヤート語、モンゴル諸語、記述言語学、危機言語、モンゴル語

1. 研究開始当初の背景

代表者がこれまで継続的に調査・研究の対象としてきたシネヘン・ブリヤート語は、モンゴル系のブリヤートおよびツングース系のハムニガンと呼ばれる民族集団によって使用される言語である。シネヘン・ブリヤート語はモンゴル語族に属するブリヤート語の下位方言として位置づけられる。ブリヤート語はロシア連邦のバイカル湖周辺でおもに使用される言語であるが、シネヘン・ブリヤート語は 20 世紀前半にロシアから中国へと亡命・移住したブリヤートおよびハムニガン、合計約 6,000 名の人々によって使用される。

移住により、彼らはそれまで接触のなかった漢民族や他のモンゴル系集団と恒常的に接触するようになった。その結果、彼らの母語であるブリヤート語も漢語（中国語）やその他のモンゴル語諸方言の影響を恒常的に被るようになった。文法構造上の、とくに形態法を中心に本来有していなかったと考えられる特徴がいくつか見られるようになってきていることが、申請者のこれまでの研究から明らかとなっている。移住から 3 世代強が経過した現在、ロシアで使用されるブリヤート語諸方言とは別の方言と認めるに足る、文法・語彙の変化が生じたといえる。

このような社会的情勢により特殊な状況に置かれたシネヘン・ブリヤート語については、以前より注目されてきた。移住当初は、ロシア（当時ソビエト）での現地調査がかなわなかった服部四郎がこの地でブリヤート語の調査をおこなった記録もある（服部 1937）。しかし、残念なことに、これまで当該言語の音韻・形態・統語に関する詳細な記述は、代表者が調査研究を始めるまでなされてこなかった。

このシネヘン・ブリヤート語の記述は、次の 2 点において重要な意義がある。(1) 母語話者数が減少しつつある危機言語であり、深刻な危機に陥る前に言語の姿を記録する必要がある。(2) 文法構造の異なる言語（シネヘン・ブリヤート語においては漢語）との恒常的接触により、構造のどの部分にどのような変化が生じるのか、そのメカニズム解明の手がかりを提示することができる。

参照文献

服部四郎 (1937)「ホロンバイルの蒙古語」『蒙古学』1. 97-111.

2. 研究の目的

上記の背景をうけ、本研究課題では (1) 当該言語の音韻・形態・統語各面の総合的記述、(2) 一次資料の公開という 2 点を目的とした。

(1) 申請者がこれまで蓄積してきた調査資料にくわえ、本研究期間に実施する現地調査・資料収集によってデータを補完し、そのデータをもとに記述をおこなう。形態法については、とくに動詞の屈折を重点的に記述する。

(2) 現地調査で得た当該言語の一次資料を文字化し、他の（言語学および周辺分野の）研究者が利用できるかたちにととのえる。

3. 研究の方法

以下、おもに 4 点の方法をとった。(1) これまでに収集した一次資料および研究実績を整理・分析し、音韻・文法概略をまとめる。(2) 音韻・文法概略をもとに補完すべきデータを確認し、研究期間内に実施する現地調査で母語話者からの聞き取り調査を実施し、得られたデータについて記述言語学的方法にもとづき分析をおこなう。(3) 関連分野の文献収集を海外（モンゴル国・中国）にて実施する。(4) 記述言語学にかぎらず、文化人類学など他分野にわたる学際的な学術資料として活用できるように、一次資料（母語話者による音声）の文字化、研究対象地域の映像資料の加工をおこなう。

4. 研究成果

目的 (1) (2) に基づき、研究期間内に現地調査 4 回、文献収集 1 回、計 5 回の海外調査を実施した。当初計画ではもう 1 回海外調査を実施する予定であったが、現地の政情不安により渡航を断念した。しかしながら、それ

ぞれ一定の成果を公開することができた。

全体を通じて総括すると、上記の目的 (1) に関しては当初の目的を達成できたといえる。一方 (2) に関しては当初期待していたほどの成果を公開することはかなわなかった。しかしながら、下記のとおり未公開分についても分析が一定程度完了している。今後逐次公開していくことをめざす。

(1) (2) の成果に関するより詳細な内容は以下のとおりである。

(1) 音韻・文法の総合的記述に関して

① 音韻・形態・統語の概略的記述

シネヘン・ブリヤート語の音韻・形態論の総合的記述への足がかりとして、当該言語の音韻・形態・統語の概要を記述し、まとめた。この成果は、代表者がこれまで編者として主体的にかかわってきた単行本 *Grammatical Sketches from the Field*. ([フィールド調査に基づく諸言語の文法スケッチ] Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 2011 年) の 1 編として英文で執筆し、刊行された。概略的な記述ではあるものの、少なくとも現時点において、シネヘン・ブリヤート語にかんする文法記述としては国内・海外含めもっとも詳細かつ総合的なものである。

② 人称所有小詞の機能についての研究

これまで収集・公開してきた一次資料をもとに、シネヘン・ブリヤート語の人称所有小詞について分析をおこない、その成果を「シネヘン・ブリヤート語の人称所有小詞」の題目で『北方言語研究』第 1 号 (北方言語ネットワーク編、2011 年 3 月刊行) に投稿し、掲載された。

この論文では、シネヘン・ブリヤート語の人称所有小詞について、以下 2 点を明らかにした。a. 同系言語であるモンゴル語に比べてシネヘン・ブリヤート語の人称所有小詞のほう所有者標示のマーカ―として用いられる傾向が強い、b. 従属節における主語標識としての機能を有している点を考えると、人称所有小詞が文末に用いられる場合には、いわゆる脱従属化 (insubordination) が起こっている可能性が高い、という 2 点である。

さらにこの人称所有小詞の本来の機能、所有者標示という点について分析をおこなった。具体的には所有者-所有物の関係にある名詞句 (「A の B」という意味関係にある名詞句) を対象に、シネヘン・ブリヤート語のほか、近隣のモンゴル語、ハムニガン・モンゴル語の 3 言語を対象として、従属部標示型 (「A の B」での「A」、つまり所有者に付属形式 (属格接尾辞) を接続する構造)、主要部標示型 (同じく「B」、つまり所有物に付属形式 (人

称所有小詞) を後続する構造)、二重標示型 (「A」に属格接尾辞、「B」に人称所有小詞がそれぞれ接続する構造) が、それぞれどのような状況で用いられているのかを分析し、比較対照をこころみた。

ハムニガン・モンゴル語には従属部標示型、(擬似的な) 主要部標示型、二重標示型のうち、主要部標示の有無 (主要部標示型・二重標示型 vs. 従属部標示型) が、譲渡可能性に関与していることが強く推測されることを指摘した。

その一方で、モンゴル語、シネヘン・ブリヤート語にも 3 つのタイプがあるが、ハムニガン・モンゴル語のように譲渡可能性に関与しているとは考えにくく、むしろ人称所有小詞が強調をあらわす要素として機能しているということを明らかにした。

この 3 言語のうち、ハムニガン・モンゴル語は、ツングース語族のエヴェンキ語との恒常的接触がおこっている。ツングース語族に含まれる言語の多くには譲渡可能であることを示す付属形式、譲渡可能接辞が存在し、譲渡可能か否かを表現しわけている。ハムニガン・モンゴル語において同様の区別があるという事実は、この区別がエヴェンキ語の接触によって生じた (もしくは保持されている) ものと考えられる。

この成果については、2011 年 8 月にモンゴル国で開催された国際モンゴル学者会議 (The 10th International congress of Mongolists) にて報告した。

③ 「形動詞」の名詞性にかんする分析

ブリヤート語の「形動詞」について分析をおこない、従来「形動詞」とされてきた動詞の屈折形式のうちいくつかは、屈折ではなく派生 (つまり、出動形容詞・出動名詞) とみなすべきであると指摘した。モンゴル系言語の文法記述において、動詞の屈折のうち、名詞的機能を付与する屈折接尾辞を「形動詞接辞」と呼んでいる。ブリヤート語の先行記述では、この「形動詞接辞」に含まれる形式が数多く認められている。しかしながら、それらの形式の統語的機能は一様ではない。

このことから、これまで形動詞接辞ととらえられてきた接辞類について、それぞれの要素の脱動詞化の度合い・名詞としての再範疇化の度合いをそれぞれ観察し、実際には屈折というよりもむしろ派生、統語的派生とみなす程度に名詞化がすすんでいる接辞がいくつかあることを指摘した。

この成果は、『北方人文研究』第 5 号 (北海道大学北方教育研究センター編、2012 年 3 月刊行) に掲載された。春季の現地調査では動詞の屈折にかんする分析の検証をおこなうことができた。

④ 形動詞（分詞）の統語的機能とその性質にかんする研究

上記③の研究成果をふまえ、動詞の屈折について重点的に分析をおこなった。シネヘン・ブリヤート語の動詞の屈折のうち、主節以外の節の述語として用いられる形式（上記「形動詞」および「副動詞」）が、それぞれどのような統語機能を有しているのかという点について分析し、従来のモンゴル諸語の記述における動詞屈折の分類が、実際の統語機能とは一致していないことを明らかにした。とくに形動詞（分詞）は名詞修飾節述語・名詞節述語としての機能のほかに、主節述語として定形動詞のかわりに多用されること、一部の形動詞は付属形式をともなって副詞節述語としても機能するという多機能な要素であることを指摘した。さらにその機能が一見「形容詞」に類似していることは、通言語的にみた場合の「分詞」の特徴に一致するものではあるが、一方で形容詞が副詞的に用いられる場合と、形動詞が副詞節述語として用いられる場合とでは形式が異なることから、「分詞＝屈折的形容詞化」という通言語的傾向から若干外れることを指摘した。

さらに典型的に似通った文法構造を有する周辺諸言語と対照したうえで、「アルタイ型」と典型的にまとめられる東アジアの諸言語においては、従来いわれる「分詞」の特徴、「動詞の屈折的形容詞化」に必ずしもあてはまらない例が同じようにいくつか見られることを示した。

この成果については、周辺諸言語を研究対象とする他の研究者と共同で、2012年6月に開催された日本言語学会第144回大会にて報告し、さらにその内容をまとめて『北方言語研究』第3号（北方言語ネットワーク編、2013年3月刊行）に投稿し、掲載された。

⑤ 成果の位置づけとインパクト

研究期間初年度における英文による文法概略の刊行は、上記のとおり現時点では当該言語のもっとも詳細な文法記述といえる。とくに伝統的なモンゴル語学に立脚した視点とは異なり、言語類型論的観点に基づいた視点からの記述である点が特色あるものとなっている。

その他の成果は、人称所有小詞および動詞屈折、とくに分詞という2点が主たる研究対象となっている。この2点は、いずれも「節」に関与するという点が共通している。2010年度にまとめた文法概略はおもに形態論に重きをおいて執筆していたため、このように節に関与する要素の統語的機能については十分に記述することができていなかった。そこであらためてこれら进行分析し、人称所有小詞は脱従属化に関与している可能性があること、また分詞（＝形動詞）にかんしては従来

通言語的にいわれる「屈折的形容詞化」とは必ずしもいいきれないということを示した。これらはいずれもモンゴル系言語の伝統的な文法記述において看過されてきた視点であった。さらに所有人称小詞であれば「脱従属化」、分詞であれば「名詞化・形容詞化」という、通言語的研究の対象として議論の対象となっているトピックに大いに関連している。つまり、モンゴル語研究および言語類型論の両方に貢献しうる成果が得られたと考えている。

(2) 音声資料の分析と公開に関して

① テキストの公開

これまで収集した資料の文字化・分析をすすめ、2011年度にその一部を『アジア・アフリカの言語と言語学』第6号（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所編、2012年2月刊行）に投稿し、掲載された。

② 成果の位置づけとインパクト

当初の計画では音声資料とテキスト資料とを合成した資料のオンライン公開を目指していたが、結果として口頭伝承3本のテキスト資料のみの刊行となった。しかしながら、公開したテキスト資料は、単に言語記述の一部というものとどまらず、その内容自体がフォークロア研究等に活用しうるものとして有意義であると考えられる。公開した3本はいずれもおそらくブリヤートのオリジナルストーリーではない。登場する動物・行動等から、他の民族集団から伝播した可能性がきわめて高い。とくに1篇は日本の「姥捨山伝説」はじめ、ユーラシアに広範に広まっている伝承と、またもう1篇は日本の「古屋の漏り」や朝鮮の「虎と干柿（호랑이와 귓감）」という名で知られる伝承とプロットが共通している。こうした伝承の伝播をさぐるうえでも有益な資料といえる。

また、これまで蓄積した一次資料のうちの多くについても、未公開ではあるが研究期間中に文字化を大幅に進めることができた。研究対象言語は国内外ともに研究者がほとんどいない状況にあるため、これらの資料の公開は今後、できるかぎり早急におこなってきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 山越康裕. 「シネヘン・ブリヤート語の人称所有小詞」 北方言語ネットワーク編

『北方言語研究』1. 63-78. 2011年. 査読有.

URL: <http://hdl.handle.net/2115/45230>

- ② 山越康裕. 「シネヘン・ブリヤート語の『形動詞』」『北方人文研究』5. 95-112. 2012年. 査読有.

URL: <http://hdl.handle.net/2115/49284>

- ③ 山越康裕. 「ブリヤート語の分詞の機能について：屈折的形容詞化と位置づけられるか」北方言語ネットワーク編『北方言語研究』3. 25-40. 2013年. 査読有.

URL: <http://hdl.handle.net/2115/52597>

[学会発表] (計3件)

- ① YAMAKOSHI, Yasuhiro. “Хамниган монгол хэлний эзэмшигч илрүүлэх арга” (How to indicate the possessor in Khamnigan Mongolian). *The 10th International congress of Mongolists, held at National University of Mongolia in Ulaanbaatar, Mongolia, 2011年8月10日.*

- ② 山越康裕. 「シネヘン・ブリヤート語の『形動詞』」池上二良先生追悼シンポジウム「北方言語研究の歩み」, 北海道大学, 2011年12月17日.

- ③ 山越康裕. 「ブリヤート語の動詞屈折形式：分詞の機能／派生との区別」(ワークショップ「東アジア接尾辞型諸言語における動詞屈折形式：分詞に関する問題を中心に」(長崎郁・江畑冬生・麻生玲子との共同発表))日本言語学会第144回大会, 東京外国語大学, 2012年6月16日.

[図書] (計1件)

- ① YAMAKOSHI, Yasuhiro. “Shinekhen Buryat.” In: Yamakoshi, Yasuhiro ed. *Grammatical Sketches from the Field*. 137-177. Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 2011年.

URL: http://lingdy.aacore.jp/jp/material/Grammatical_Sketches_from_the_Field.pdf

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山越 康裕 (YAMAKOSHI YASUHIRO)

札幌学院大学・人文学部・准教授

研究者番号：70453248